

総合演習

「子どもを取り巻く環境」

18－1204 井上友希

18－1219 佐藤里恵

目次

1 はじめに	P 2
2 虐待 (井上)	P 3 ~ 6
3 食育 (井上)	P 7 ~ 1 2
4 健康 (佐藤)	P 1 3 ~ 1 6
5 遊び (佐藤)	P 1 7 ~ 2 6
6 参考文献	P 2 7
7 まとめ	P 2 8

はじめに

今日、子どもの肥満や集中力の欠損などが問題視されている。それは子どもを取り巻く環境が変化しているためだ。子どもを取り巻くさまざまな環境の中でどのような変化が起こっているのか。昔はこうだった、と言うように昔に比べて悪く変化していったことも多いだろう。逆に昔より向上したというような点もあるだろう。私たちはその変化に目をむけて、将来どのような変化をするべきか考えていくべきなのである。保育に関わる者として、どのように子どもたちを取り巻く環境が変化しているか、どのように子どもたちを守っていくかを考え、実行していくために研究をすることにした。今回私たちは子どもを取り巻く環境のなかでも、近年注目されている「虐待」「食育」「健康」「遊び」の環境について取り上げることにした。

虐待

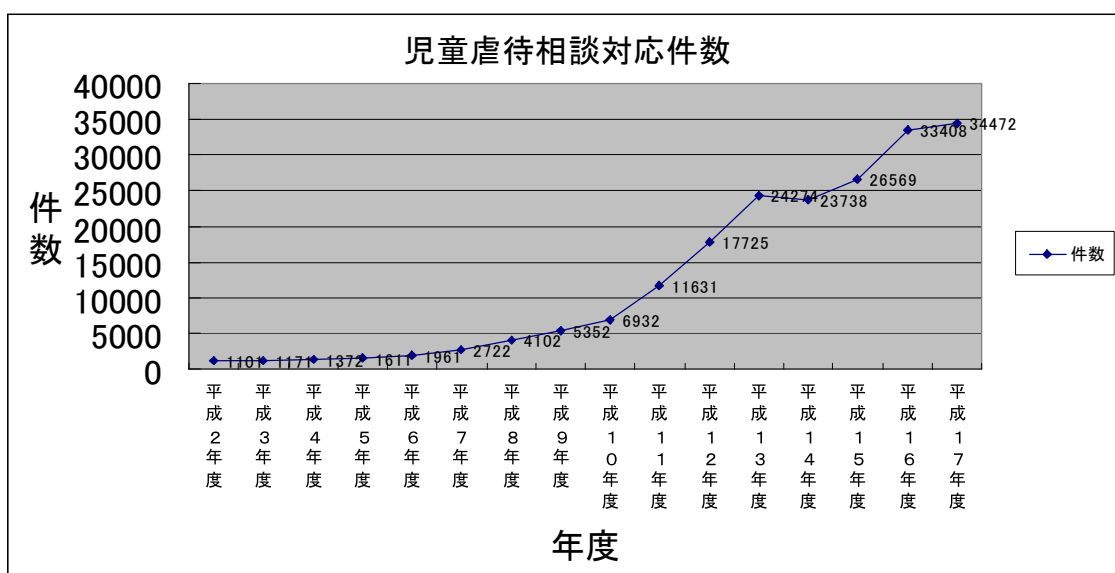
現在の現状 ～増え続ける虐待とその背景～

子どもは、家族、地域、保育所や学校などの社会制度という主に3つの環境で育つといわれている。子どもは、「自ら育つ」力を持っているが、一方で「育てられる」存在でもある。特に、乳幼児期においては、どのような環境で育てられたかで今後の成長に大きく関わってくる大切な時期だといえる。

今日、子どもの人権を無視した子どもへの不適切なかかわりが社会的な問題としてとりあげられている。“しつけ”と称した児童虐待である。

平成2年度から近年までの児童虐待相談対応件数は増え続けるばかりである。グラフにするとその推移がよく分かるが、近年では3万件を超えるという異常事態となっている。

一体、何が原因なのか、今と昔ではどのような変化があるのか、またそのような現状を目の前におき、私たち保育者はどのような援助が求められているのかを深く考えていきたい。



種類 ～事例～

今まで、家族というと一般の意識の上でも家族は無条件に愛に溢れ、暖かく幸せなイメージを持ってきた。しかし、個別に家庭の中に目を向けていくと様々な要因によって機能不全を起し、深刻な問題を抱えている家庭は少なくないことが現状である。

家庭内の暴力の実態は、子どもばかりが標的になるわけではない。例えば夫が日常的に妻に暴力をふるっていたとして、耐え切れず妻が子どもに暴力をふるうケースも少なくはない。暴力は連鎖されていく。そして弱いものが、一番の被害者となってしまう。小さな身体に背負った心の傷はどれだけ深いものか、想像もつかない。

日本で家庭内の暴力は、ドメスティック・バイオレンス(DV)、家庭内暴力、児童虐待、高齢者虐待の4種類にわけられている。

DVの区分と内容は次の通りとなっている。

暴力内容の区分	内容
身体的暴力	身体に危害を加える行為で、「殴る」「蹴る」などのほか、物を使っての暴力を含む。また「包丁をつきつける」など、身体に危害を加えると脅かす行為も含む。
精神的暴力	「暴言」「無視」「嫌がることをする」などの威嚇、強制によってその人の自尊心を傷つける行為をいう。
性的暴力	性的関係を強要するなど、性的に相手を侵害し、その人の身体の安全を脅かす行為をいう。
経済的暴力	収入をわざといれないなど、金銭の管理によって相手を経済的に支配する行為をいう。
対物暴力	相手の身体に直接の被害は及ぼさないが、周囲の物を破壊することによって打撃を与える行為をいう。

またこうした今日の社会的状況の中で、子育てにおける悩みや戸惑い、不安などネガティブな子育て感情を抱いている家族は少なくない。例えば食事や排泄、病気などの、子どもの身体的・心理的不安や言葉が遅い、落ち着きがない、仲間づくりがうまくいかないなどの発達不安、気性が激しい、人見知りをする性格に対する不安などを抱えている。また、今日の少年犯罪や、幼児・児童が被害者となる様々な誘拐殺人事件などの社会的状況が、保護者の子どもの育て方に不安要素を抱える要因となっている。

こうした環境の中で子育ての責任を夫婦だけに求めるのではなく、社会全体で支えていくことが大切である。2003年児童福祉法改正によって市町村での子育て事業の推進が制度化され、施策の代表として、「地域子育てセンター」が設けられた。

保育所などに併設されているセンターでは、経験豊かな保育士が育児相談にあたり、子育て情報の提供などをしており、保育者のニーズは子どもの前だけでなくなってきたのを実感させられる。

「虐待」は愛からおこる

どうして虐待は起こるのだろうか？そして何故これまでも増え続けるのだろうか。多くの原因が考えられる。社会の変化もあるだろう。昔と今の違いは何だろうか？

私が興味深いものが、虐待は愛からおこるという考え方だ。

子どもを愛している。可愛いわが子を虐待してしまう。このふたつはイコールで結ばれることがあるのだろうか。



参考図書

発行所 川出書房新社

著者 富田 富士也

「虐待は愛からおこる」

この本を読んで、私は知らず知らずのうちに、自分の中で虐待に対しての偏見があることに気づいた。虐待をする親は、子どもを簡単に傷つけることができる・子どもが苦しんでいても平気であるような気がしていた。しかし、実際には多様なケースがあり、中には虐待をしてしまう自分を責め続けている母親もいる。誰にも打ち明けることができず、苦しみながら。

最近の虐待報道を見ていると、その犯罪行為の側面ばかりがクローズアップされすぎて、親を犯罪者として断罪して一丁上がりとする風潮が強まっているように思えます。

たしかにテレビニュースの視聴者にとっては、それで一件落着かもしれませんが、しかし事件として処理することができたとしても、親子関係にまで終止符を打つわけにはいきません。どんな判決がでたとしても、親子関係は終生切ることができないからです。～省略～

「虐待」までの子育て、あるいは親育ての「手間」として受け止めて、より多くの時間と手間をかけて親子でわかりあっていく必要があるのです。

視点を変えれば、「虐待」の事実こそ、親子の「原風景」に変えてしまえるのが親子の絆だと、前向きに捉えなおすのです。そうした苦勞を引き受けず、“安易”な道を選択しないことを願わずにはられません。

親子の縁は切れないから継続するし、継続する中で、「虐待」という傷はいく

らでも修復することができるはずですが。そういう親子双方の歩み寄りが、「虐待」を愛に変えるのです。～本文より引用～

最近では、人間関係の希薄化が心配されている。核家族化による、近所づきあいの減少や、近くに助けの手がないことから、母親の育児の負担が大きくなるなど、子どもが育つ上ではマイナスの要素が多く存在する。

昔は、地域全体が子育てに携わり、近所の子はみんな育てるような感覚であった。温かみがあって、みんな一緒に育った。今は、子ども同士、親同士が関わる環境がすぐそばになく、保育者として、そのような場所や行事を設けることもひとつの援助法となっている。

私たち保育士は、子どもの育ちの援助だけでなく、親を含めた家族援助という視点が必要だと思われる。2001年の児童福祉法改正で保育士資格が法定化され、家族援助論が養成課程に位置づけられ、保育者のニーズはさらに広い範囲から求められるようになった。

私たちができる家族援助は大きく3点考えられる。

- ①家族が抱えている問題に現実的に対処することで、問題の軽減や緩和を図ることができる。
- ②親子の中に起こるさまざまな問題への対処能力を身につけるような援助をする(具体的に言うと、助言によって、答えを本人が見つけられるよう導いていく)
- ③家族と地域や社会資源を結びつけることによって、地域の一員としての家族を再認識させる

現在の子育ては、少子化や核家族化はもちろんのこと、親のライフスタイル、子育てスタイルの多様化などが目立っている。子どもを中心とした家族関係が多種多様である。保育士はそれを前提として家族を援助する必要があるだろう、そして、虐待という最悪の状況を未然に防げるよう援助内容を考える必要があるだろう。

子ども一人ひとりが違うように家族のあり方も全く異なる中で、子どもの発達状況に応じた子育ての援助をしていかなければならない。

そのようなことをふまえて、子どもの立場にたった保育が必要である。

食育

幼児期の食事は、生命の維持・発達・成長・心身の健康・ものの感じ方・考え方・性格にまで影響を与える。

健康的な食習慣の基礎は、人生の初期において精神的によい食体験があったところに形成される。

それは、①三食を規則正しく摂る。②食卓には家族の心の交流の場としての楽しい雰囲気がある。③献立は、栄養のバランスが取れ、変化に富んでいる。の三つが大事とされる。これが子どもの安定した情緒の発育を促し、親子関係もこの食事を通して築き上げられる。

私たちは、現在の家庭の食育の現状をより深く調べるために、3、4、5歳児の保護者の方118名を対象にアンケートを実施致しました。

お子様の食育についてのアンケート

①お子様の夕食の時間帯はいつですか？

ア、18時以前 イ、18時～19時 ウ、19時～20時 エ、20時以降

②お子様は誰と夕食をとることが多いですか？

ア、家族全員 イ、兄弟のみで ウ、一人で エ、その他()

③お子様は夕食を一週間にどのくらいとっていますか？

ア、毎日とる イ、週4日以上 ウ、週1日以上 エ、ほとんどとらない

④の質問で、ウ、エと答えた方だけその理由を選んでください。

ア、食欲がないから イ、時間がないから ウ、いつも食べないから

⑤朝食の主食は何ですか？

ア、パン イ、ご飯 ウ、ご飯とパン エ、その他()

⑥お子様は食べ物(食材)の好き嫌いがありますか？

ア、7品以上ある イ、3品以上ある ウ、1品以上ある エ、全くない

⑦⑥の質問で、ア、イと答えた方だけお答えください。

お子様の好き嫌いにどのように対応されていますか？

ア、できるだけ食べ(させ)るよう努力している

イ、代替りの食べ物(食材)で補うようにしている

ウ、特別な対応はしていない

エ、その他()

⑧ご家庭では親子で食事を作ることがありますか？

ア、よく一緒に作る イ、たまに一緒に作る ウ、今までに作ったことはある エ、全くない

⑨一週間にどのくらい外食にいきますか？

ア、ほぼ毎日 イ、週4日以上 ウ、週1日以上 エ、ほとんど行かない

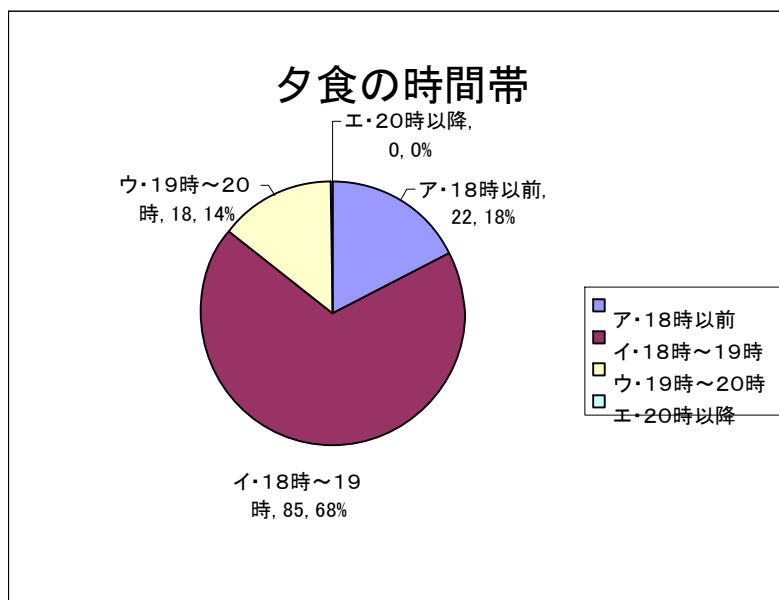
⑩一週間にどのくらいインスタント食品やレトルト食品を食べますか？

ア、ほぼ毎日 イ、週4日以上 ウ、週1日以上 エ、ほとんど食べない

⑪お子様の食育について気になることがあれば記入してください。

()

① お子様の夕食の時間帯はいつ頃ですか？

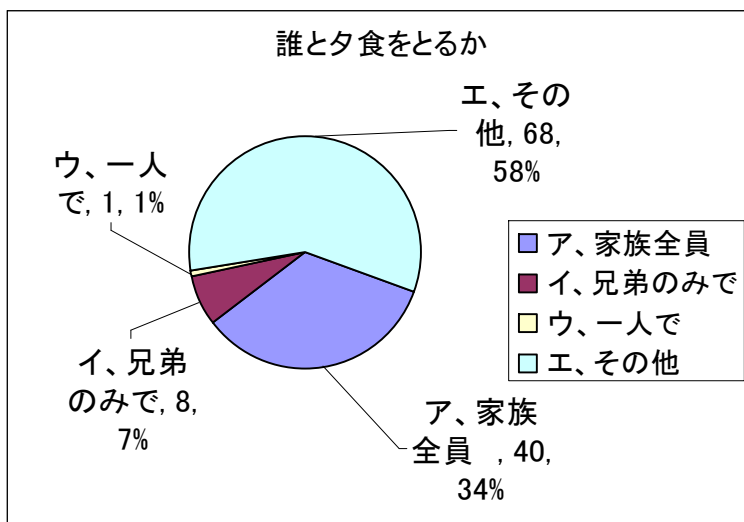


18時～19時までの間に集中しました。

中でも理由として多かったのは20時、21時までに寝かせるため、又は眠くなってしまう前に早めの食事を、ということでした。お風呂にはいる、や習い事などの理由も目立ちました。

生活リズムを狂わしたくないという意見が目立ちました。

② お子様は誰と一緒に食事をとりますか？



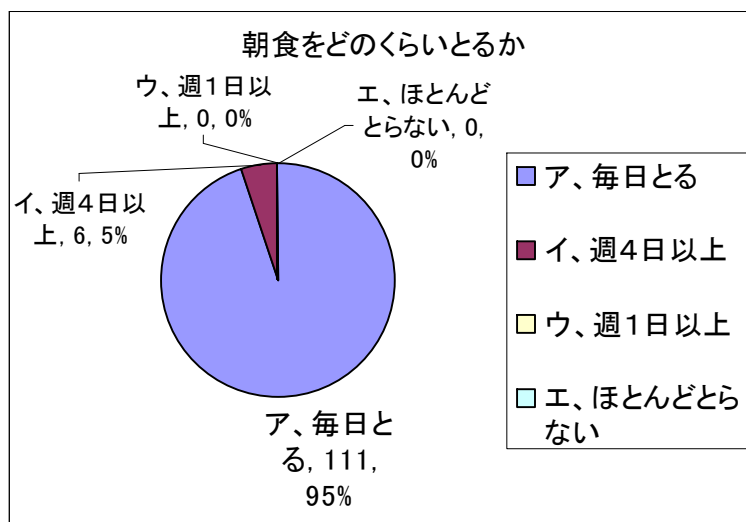
家族全員で食事をする家庭の少なさに驚きました。

大半の家庭が、父親の仕事の帰りが遅く、父親以外の家族で食事という形をとっているようです。

土日や、仕事の休みの日は家族全員で、という答えが目立ちました。

家族全員でご飯を楽しく食べたい、子どもにいいと思うからなどの回答が多かったです。

③ お子様は朝食を一週間にどのくらいとっていますか？

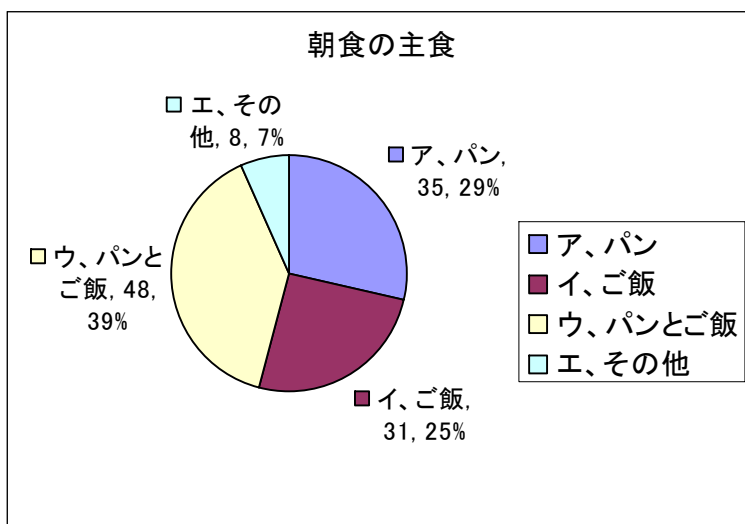


毎日とるという答えが95%で、ほとんどでした。一日の活力として一番大切、あたりまえ、当然のことだと思っている、などとの回答でした。常識なことですが、なかなか思うように食事が進まず、牛乳やシリアルだけですませてしまうことがあるという答えが少数

ありました。

④ ③の質問でウ、エと答えた方だけ理由を選んでいただく欄でしたが、ウ、エと答えられた方がいませんでした。

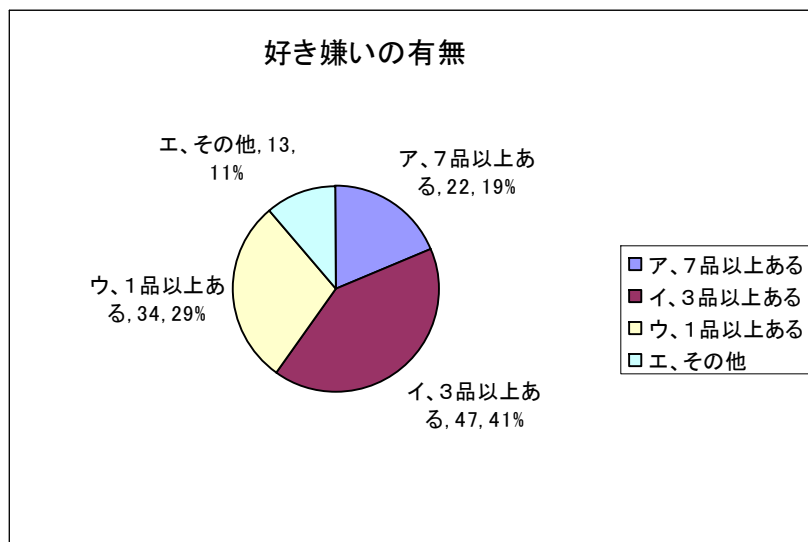
⑤朝食の主食は何ですか？



ほとんどの家庭で、パンかご飯に集中しました。比率は同じくらいでした。ご飯を回答した保護者の方は、米のほうが腹持ちがいい、エネルギーになりそうなどの意見がありました。

その他では、コーンフレークなどのシリアル類、果実、お好み焼きなどがありました。

⑥ お子様は食べ物(食材)の好き嫌いがありますか？



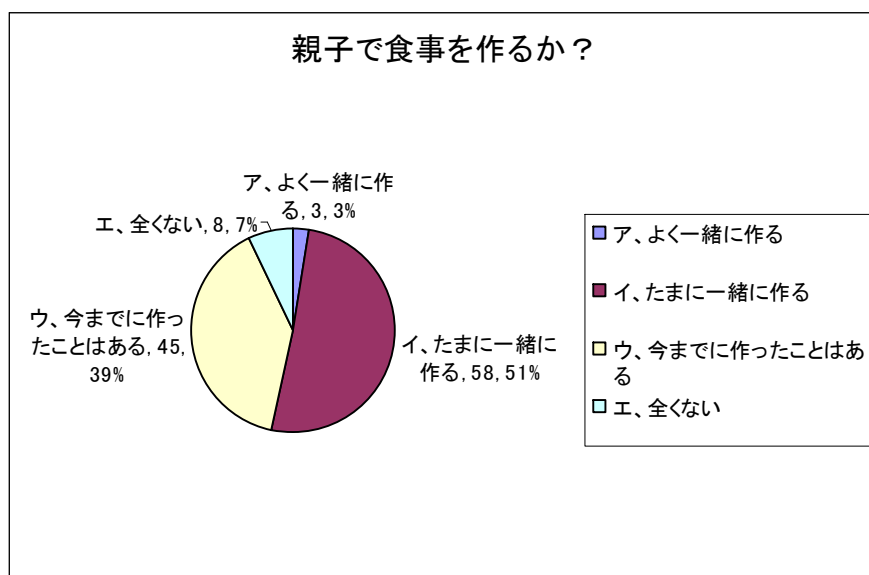
3品以上あるという答えが一番多かったです。

やはり、苦い野菜など食わず嫌いな食べ物が多いようです。

⑦ 3品以上あると答えた方の中で、お子様の好き嫌いへの対応の仕方と

しては野菜ジュースで補充したり、無理はさせないが、野菜を細かく切って料理にまぜて本人が知らないうちに食べれるようにするなどの工夫をされている家庭も多く見られました。

⑧ ご家庭では親子で食事を作ることがありますか？



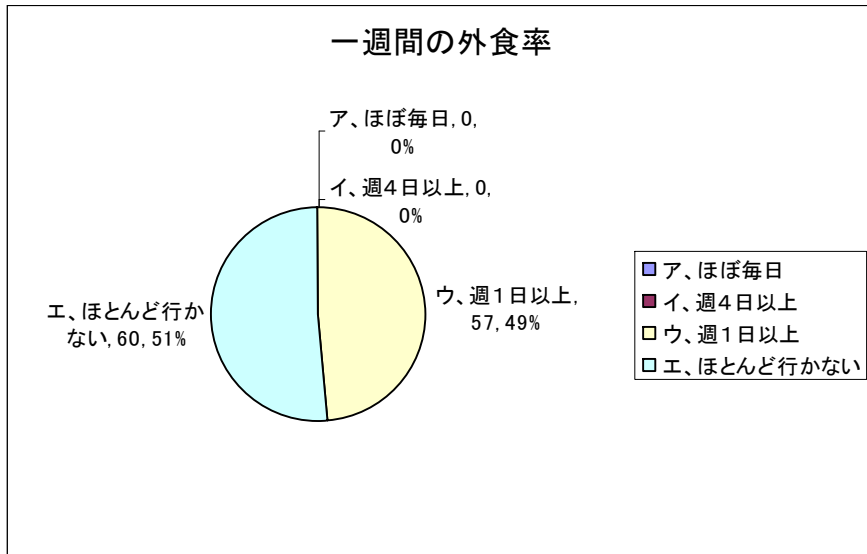
親子でよく食事を作ると答えた方はわずか3%でした。

たまに作る、又は今までに作ったことあるという答えがほとんどでした。全くないという回

答も8%ありました。

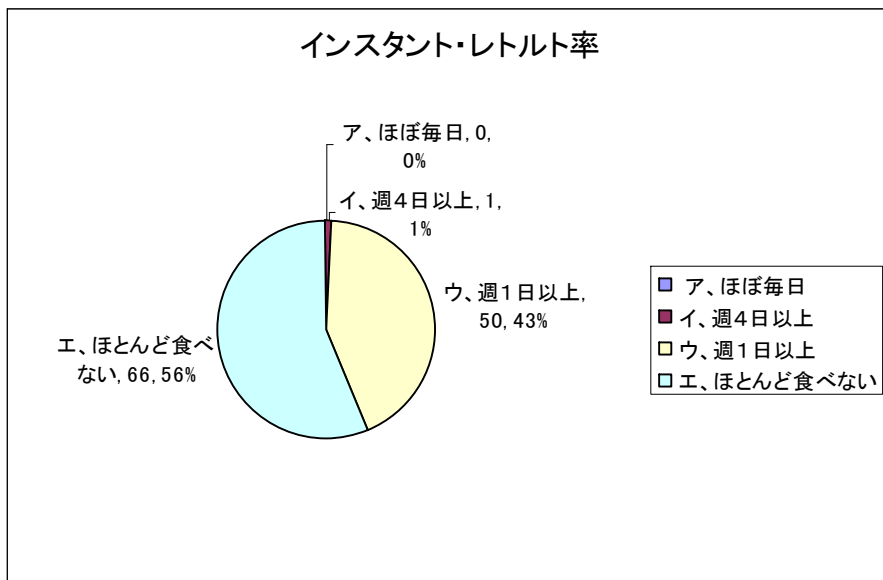
理由としては、下に小さな妹や弟がいると手を出し、火を使う料理と一緒に作ることができないという理由が多かったです。又、一緒に作りたい気持ちはあるが、働いているため、時間や機会がとれないという回答も見られました。

⑨ 一週間にどのくらい外食に行きますか？



週一以上、ほとんど行かないに答えが割れました。

⑩ 一週間にどのくらいインスタント食品やレトルト食品を食べますか？



インスタント、レトルト食品は、手軽ですが、あまり与えないようにしている家庭が多かったです。

⑪ お子様の食育について気になることがあれば記入してください

- ・ 食べ方にむらがある(好きなものはたくさん食べる、嫌いなものは食べない、など)
- ・ 食べるスピードが遅い
- ・ 食欲がありすぎて、限度を知らない
- ・ 食欲がない、量が少ない
- ・ 離乳期に食べていたものを食べない

- ・ 朝食時、自分から食事をしようとしなない
- ・ 固い食品が苦手
- ・ 食わず嫌が多い
- ・ 薄味を心がけているが父親が濃い目になると(ソースをかけるなど)マネして濃い味を食べたがる
- ・ 給食をあまり食べない
- ・ ワンパターンな味付けしか食べない

子どもの健康

幼児教育を学んでいる者なら必ず知っている「SIDS」という言葉。日本語では乳幼児突然死症候群と言う。大学の授業でも何度も耳にする言葉である。この乳幼児突然死症候群は原因不明といわれている。私は、託児所でのアルバイトや実習において乳児の睡眠の現場を見ている。また、4月からの就職先で乳児の睡眠の現場を見るだろう。したがって、そのような現場で子どもたちの命を守るために乳幼児突然死症候群のメカニズムと予防についてしっかり考えようと思う。子どもを取り巻く健康の中でも、まだ解明されていない乳幼児突然死症候群の原因と予防について私なりに考えてみることにした。

まず、乳幼児突然死症候群の症状と実態をあげてみる。乳幼児突然死症候群とは「それまで健康状態及び既往歴からその死亡が予測できず、しかも死亡状況及び剖検によってもその原因が不詳である乳幼児に突然死をもたらす症候群」(平成6年度厚生省心身障害者研究班による)とされている。この症候群は窒息や事故や病気ではないとされている。様々な悪条件からなる発作のようなものであると考える。乳児の死亡原因としては、日本で第3位、欧米で第1位となるほど多い。なんと最近までは、日本では年間400～500人の尊い命が失われていた。この数字は出生児の約3000人に1人の割合である。しかし、最近ではいくつかの研究と予防策により発生件数は減少傾向にある。2007年の統計では日本における乳幼児の死亡でSIDSと診断されたものは158名であるが、未だに解明しきれていない。2005年には有名歌手が長男を突然死で亡くし、自身のホームページで『いつも通りおやすみと言ったままの突然のお別れでした』とコメントしており、死因は乳幼児突然死症候群の可能性が高いとされている事例もある。このことから、乳幼児突然死症候群は身近な乳幼児死亡の要因

なのだ。発生ケースとして、1歳児未満の乳児に多く、特に1～6ヶ月の乳児の割合が高い。女の子より男の子の方が多く、夏より冬の方が多いという調査もある。発生場所として、自宅より託児所や保育園などの保育施設で起こっていることが多い。そのため保育施設で起こった乳幼児突然死症候群のなかで、保護者側と保育者側とが争ったケースもあるそうだ。保護者側は窒息死、保育者側は SIDS というそれぞれの見解の違いから争ったそうだ。また、原因がはっきりとしていないために、例えば虐待や事故が原因で死亡してしまった場合でも「眠っていたかと思ったら死亡していた。」と報告を受ければ、SIDSによる死亡であると誤診してしまうケースも考えられるのだ。このような事例は世界中多々ある。それは、乳幼児突然死症候群の発生要因や症状がはっきりと解明されてはいないためだと考える。そのため厚生労働省は平成17年にSIDSに関するガイドラインを公表し、慎重な診断が必要だということを表した。

診断に際しての留意事項：

- 1) 諸外国で行われている研究も考慮し、乳幼児突然死症候群(SIDS)の診断は原則として新生児期を含めて1歳未満とするが、1歳を超える場合でも年齢以外の定義をみだす場合に限り乳幼児突然死症候群(SIDS)とする。*
- 2) 乳幼児突然死症候群(SIDS)の診断は剖検に基づいて行い、解剖がなされない場合および死亡状況調査が実施されない場合は、死因の分類が不可能であり、従って、死亡診断書(死体検案書)の分類上は「12.不詳」とする。
- 3) 乳幼児突然死症候群(SIDS)は除外診断ではなく一つの疾患単位であり、その診断の為には、乳幼児突然死症候群(SIDS)以外の乳幼児に突然の死をもたらす疾患および窒息や虐待などの外因死との鑑別診断が必要である。
- 4) 外因死の診断には死亡現場の状況および法医学的な証拠を必要とする。外因死の中でも窒息死と診断するためには、体位に関係なく、ベッドの隙間や柵に挟み込まれるなどで頭部が拘束状態となり回避出来なくなっている、などの直接死因を説明しうる睡眠時の物理的状況が必要であり、通常使用している寝具で単にうつぶせという所見だけでは診断されない。また、虐待や殺人などによる意図的な窒息死は乳幼児突然死症候群(SIDS)との鑑別が困難な場合があり、慎重に診断する必要がある。

乳幼児突然死症候群(SIDS)のメカニズム

次に、乳幼児突然死症候群の発生要因について考えてみる。発生状況などの研究より様々なことが見えてきた。乳幼児突然死症候群の要因といえば、「うつぶせ寝」がまずあげられると思うが、実はそれだけではない。発生が冬に多いことから考えてみる。冬は寒さのために体を温めようとする。大人は乳児が寒くないように、衣服や靴下、手袋などの防寒、さらには分厚い掛け布団などで体を温めてあげようとする。しかしこの体を温める行為が、実は乳幼児突然死症候群の危険因子なのだ。ある剖検所見では、死亡後、時間が経過して熱が散るにも関わらず高体温の場合が多く、また発汗していることが認められたのだ。さらには、小腸粘膜に熱射病の際に見られるような組織の異常も発見されたのだ。これらのことから、暖めすぎによるうつ熱が乳幼児突然死症候群の発生要因の一つであると考えられる。未満児に発生が多い理由として、心身ともに未熟な乳児は自分の思うように体を動かしたり、思いを伝えたりする能力が育っていないためだと考える。うつ熱を引き起こす外的環境因子として、着せすぎ、ストーブやホットカーペットなどで高温環境下に長時間寝かされた場合があるが、その他にも、放熱効果の高い腹部側からの放熱障害を引き起こす要因としてうつぶせ寝があげられる。SIDSの要因としてうつぶせ寝が知られているが、元の要因はうつ熱によるものなのだということがわかる。SIDSをふせぐためにはこのうつ熱を放散させることが有効なのだ。カルフォルニアの医療サービス団体の調査によると、扇風機のある部屋で寝かせた子どもは、扇風機がない場合によるリスクが72%低く、窓を開けた場合は32%低いとわかった。風を通すことで乳幼児の鼻や口に二酸化炭素がとどまりこむ可能性が低下するのだ。以上のようなことから、乳幼児突然死症候群の発生要因として乳児うつ熱が危険因子だということがわかる。

乳幼児突然死症候群(SIDS)の予防策

乳幼児突然死症候群のメカニズムから、うつ熱を溜め込ませないようにすることが有効な予防策であると考えられる。気温が低いからといって必要以上に着込ませたり、室内温度をあげたりしないことが大切だ。また、うつ熱を引き起こす要因と考えられる「うつぶせ寝」をさけ、体温を放熱・発汗しやすい衣服をさせることも必要である。手足の温度が暖かく、睡眠中に発汗していたらうつ熱による呼吸運動の抑制の危険があるので注意を要する。そのような症状が見られたら、衣服や布団を脱がせ、涼しい風のあるところに移動させる。私のアルバイトをしている託児所でも、子どもが睡眠を始めたら、10分ごとにタイマーをつけ呼吸の確認をしている。子どもが睡眠をしているときは、できるだけ目が行き届く場に寝かせ、こまめに呼吸や体温を確認してあげることがSIDSを防ぐ手段になる。これらのことは、大人が注意しなければいけないことだ。乳児にとって快適で安全な睡眠環境を準備してあげることが重要なことである。

子どもの遊び

近年、子どもの遊びの環境は変化している。現代の子どもたちは体力・運動能力が著しく低下しているとよくメディアでも言われている。その要因は、遊びの環境の変化にあると考える。子どもにとって遊びは重要な役割を担っている。子どもは遊びの中で、ルールや社会性、基本的な生活習慣を学ぶ。また、体力・運動機能を身につけていく。私は、子どもの遊びの環境がどのように変化しているのかを調査することにした。昭和40年以前、天気の良い日は必ずといっていいほど外遊びをしており、家の庭や田んぼ、道路、山や川などあらゆるところが遊び場だった。缶けりやかくれんぼ、めんこなども外で遊んでいた。自然にあふれ、身の回りの自然で子どもたち自信が遊びを作り出していた。また、集団遊びが中心で上級生が下級生の面倒を見たり、近所の人たちとの交流も盛んで外で遊んでいる子どもたちを見守ってくれているようだった。昔の子どもの遊びを取り巻く環境はそういうものだった。では、現在子どもたちを取り巻く遊びの環境はどのような変化をしたのだろうか。子どもたちを取り巻く遊びの環境についての10項目のアンケートを実施した。

岡崎女子短期大学附属二葉幼稚園にご協力いただき、子どもの遊びについて以下のアンケートを集計した。

実施したアンケート資料

*お子様の遊びについて

①お子様は休日どこに出かけることが多いですか？

ア、屋外で遊べる場所 イ、室内で遊べる場所 ウ、ご両親とお買い物

エ、その他 []

②平日、園より帰宅されてから、お子様はどのような遊びをしていますか？

ア、屋外で運動遊び イ、室内遊び ウ、あまり遊ばない エ、その他

→具体的な遊びが分かれば記入してください [例ままごと]

③お子様は電子ゲームを持っていますか？

ア、自分専用の物がある イ、兄弟で使える物がある ウ、家族で使える物がある エ、ない

→具体的な機種と台数および、ソフトの数をご記入下さい

[機種名と台数] ソフトの数 []

④お子様は一週間のうちにどのくらい電子ゲームをしていますか？

ア、ほぼ毎日 イ、週4日以上 ウ、週1日以上 エ、ほとんどしない

⑤ ④の質問でアイウと答えた方

お子様は一日にどのくらいの時間電子ゲームをしていますか？

ア、6時間以上 イ、3時間以上 ウ、2時間以上 エ、1時間未満

⑥お子様が電子ゲームをする時間を制限していますか？

ア、常にしている イ、気がなったときはしている ウ、あまりしていない エ、全くしていない

⑦お住まいの近くの地域に屋外で運動遊びができるような公園などの場所がありますか？

ア、すぐ近くに複数ある イ、すぐ近くに1つはある ウ、離れたところにある

エ、徒歩で行ける範囲には全くない

⑧お子様は平日には誰と遊ぶことが多いですか？

ア、保護者 イ、兄弟 ウ、友達 エ、その他 []

理由 []

⑨お子様は休日には誰と遊ぶことが多いですか？

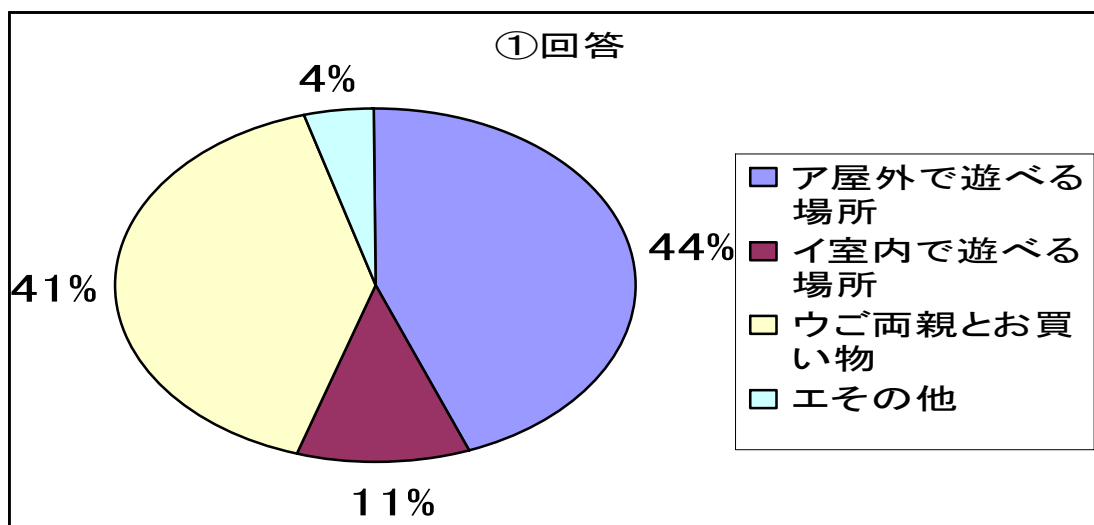
ア、保護者 イ、兄弟 ウ、友達 エ、その他 []

理由 []

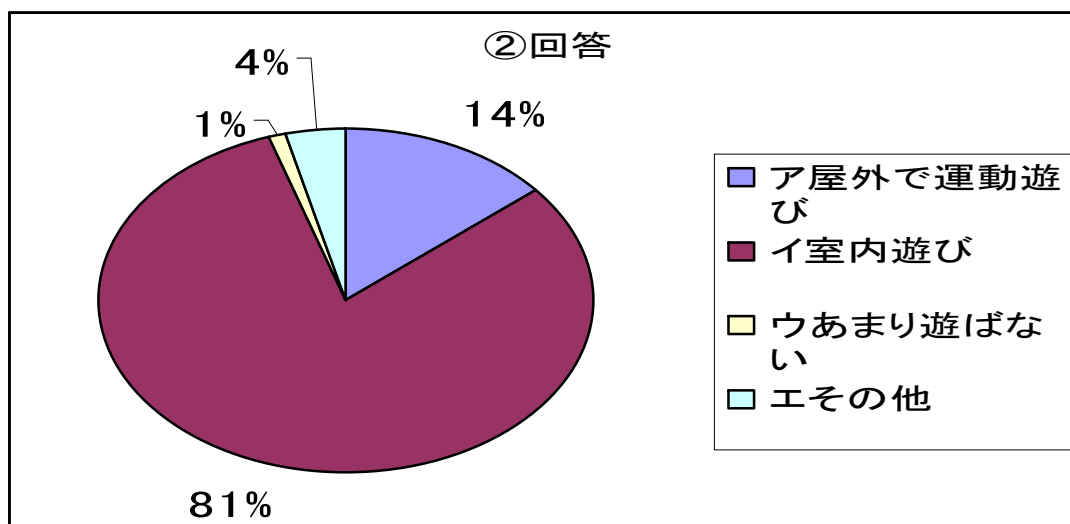
⑩その他遊びについて気になることがあれば記入してください。

[]

アンケート結果

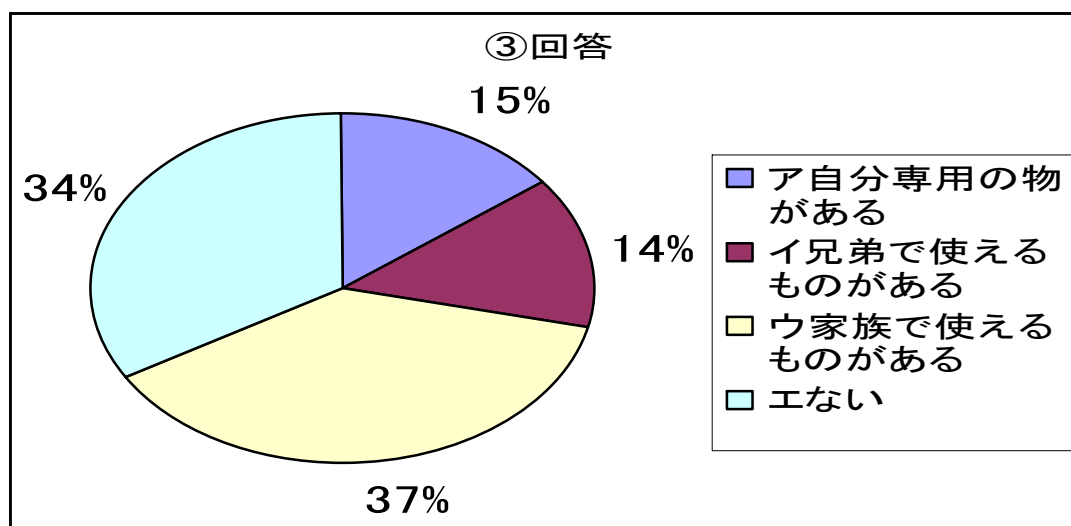


① のアンケート結果から、子どもが休日にどこへ出かけるかという質問に約44%の人が屋外で遊ぶと回答しているが、室内や買い物などインドアで過ごす人が約52%と半数以上を占めている。子どもたちの遊びは屋外遊びから室内遊びに変化していることがわかる。

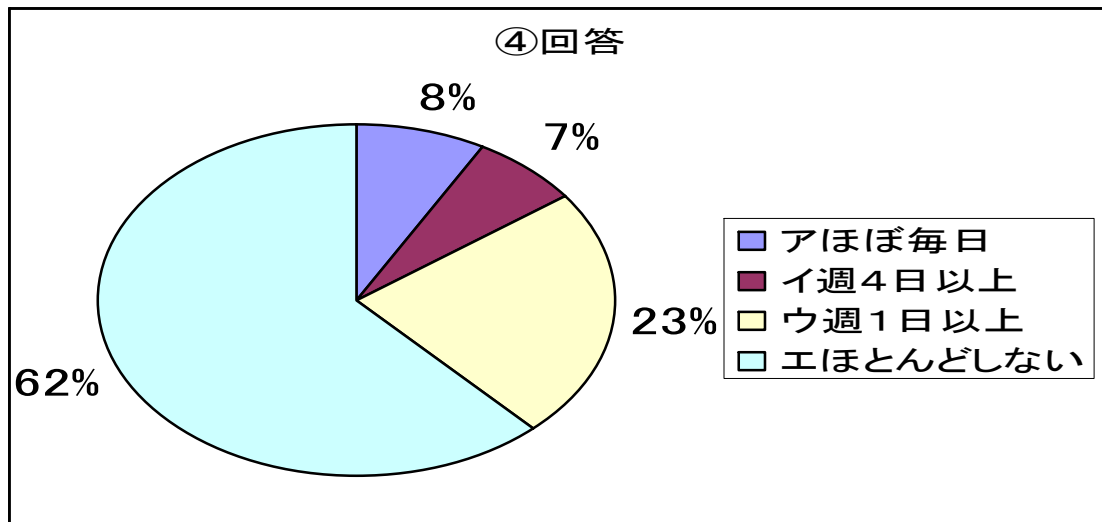


② のアンケート結果から、子どもが平日園より帰宅してからどのような遊びをするかという質問に約81%もの人たちが、室内で遊ぶと回答している。その遊びの内容として、お絵かき・絵本を見る・ままごとにつぎ、ゲームという回答も多数あった。その他にも、工作・ごっこ遊び・人形遊びと室内遊びがほとんどを占めている。また、これらの遊びは一緒に遊ぶ相手を必要とせず、一人で遊ぶことができってしまう。よって、この遊びの内容から、子どもの遊

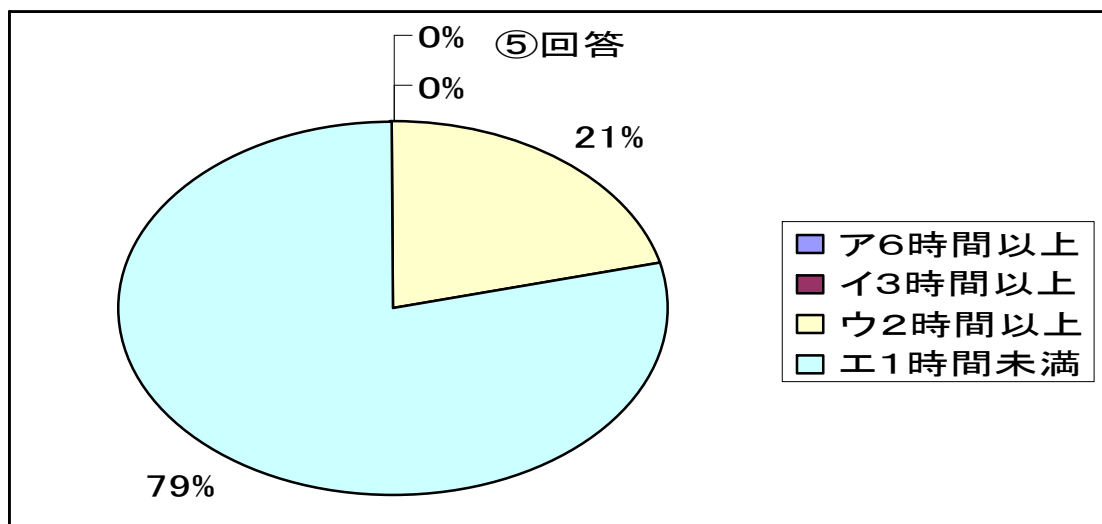
びが孤立化していることがわかる。



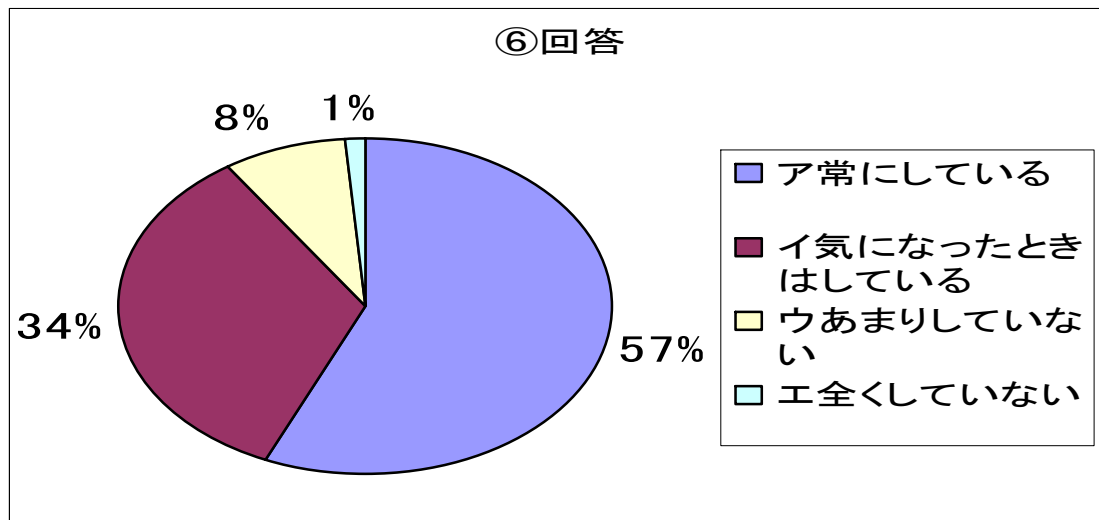
- ③ のアンケート結果から、子どもがゲームを持っているかという質問に約 67% の家庭でゲーム機を所有していると回答している。ゲーム機という高価なものは子どもでは購入できないことを考えると親の意識も変化していることがわかる。最近では、屋外で遊んでいてもゲーム機で遊んでいる子どもをよくみかける。ゲーム機の種類として、多い順から任天堂DS、WII、プレイステーションと並ぶ。特に群を抜いて任天堂DSが多い。任天堂DSはポータブルゲーム機で持ち運びができるため、屋外でゲームをしている子どもの多くは任天堂DSをしている。親や兄弟がゲームをしている家庭が多く、子どもたちの興味はゲーム機のようなハイテクなおもちゃに傾きつつある。それにより年齢も幼稚園に通う3歳から6歳の子どもたちへと低年齢化しているように思う。家族所有が多いことから、ゲームソフトの数も多い。ある家庭では30以上というアンケート結果もあった。



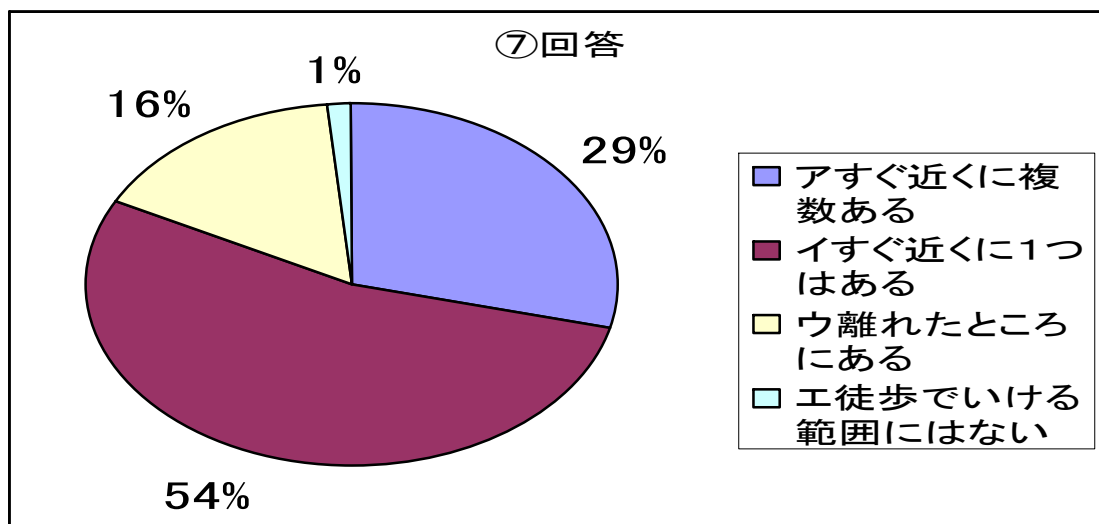
④のアンケート結果から、ゲーム機を持っている家庭の子どもが1週間にどのくらいゲームをしているかという質問に約62%の子どもはほとんどゲームをしないと回答した。しかし、約8%の子どもたちは毎日という回答だった。



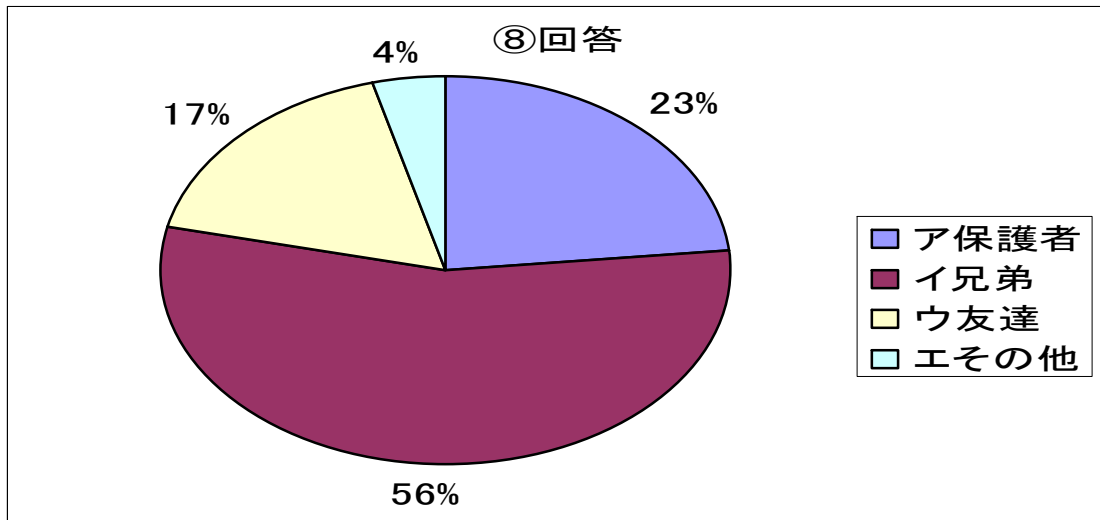
⑤のアンケート結果から、④のアンケートで子どもが1週間のうちにゲームを1日以上する(アイウ)と回答した人は、1日にどのくらいの時間ゲームをしているかという質問に3時間以上するという回答はなかった。しかし、2時間以上ゲームをしている子どもが21%もいた。



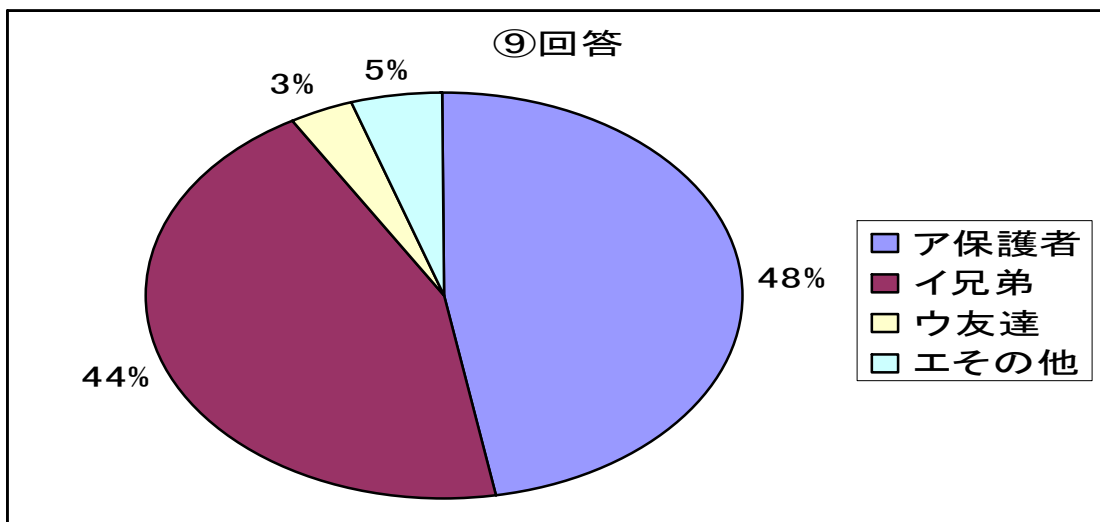
⑥のアンケート結果から、子どものゲーム時間を制限しているかという質問に約91%はしていると回答した。ゲームをすることは悪いことばかりではなく、ゲームによってルールを覚えたり、友達や家族と対戦して交流ができたこともある。子どもは自分で時間を制限したりする力が未熟なので、ゲームをするときは時間や約束を守って遊ぶように大人が管理してあげることが必要だ。



⑦のアンケート結果から、自宅の近くに屋外で運動遊びができる公園などの施設はあるかという質問に約83%は近くにあると回答した。約17%の人は近くにないと回答した。屋外で運動遊びができる場所は公園だけではなく、昔の遊びの環境で触れたように家の庭や田んぼや道端でもいいのだ。しかし、現在の世間の風上から犯罪や車などの普及により交通事故の恐れが強くなり、そういった場所で子どもたちが遊ぶことが難しくなっているのが現状だ。



⑧のアンケート結果から、平日に誰と遊ぶことが多いかという質問に約 79%は家族と過ごすという回答だった。その理由として、「子どもが習いごとをしている」「近くに遊ぶ友達がいない」「預かり保育をしているため、友達と遊ぶ時間がない」「引越しをしたばかりで親、子、ともに近くに友達がいない」という回答があった。このアンケートから、習い事により子どもの生活が忙しい、子育ての孤立化が見られる。



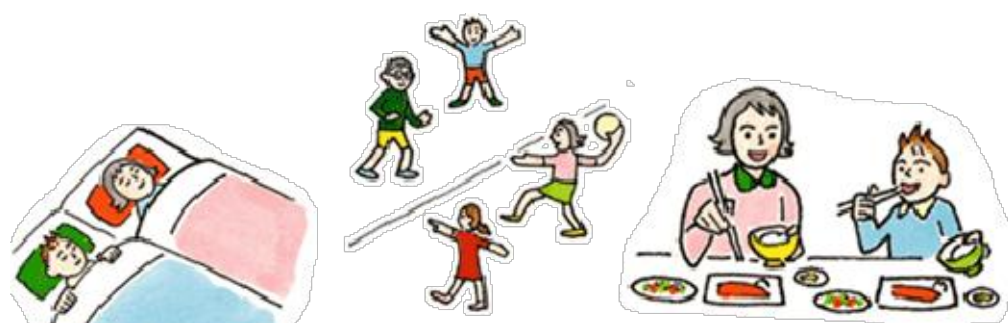
⑨のアンケートから、休日に誰と遊ぶことが多いかという質問に約 92%は家族で過ごすという回答だった。平日では、就労で特に父親とのかかわりが少ないため、休日家族で過ごす日としている家庭が多いようだ。

⑩のアンケート結果から、子どもの遊びについて気になることはあるかという質問にいくつかの回答があった。

- ・ 兄弟の影響でゲームに興味がいき、親の話を聞かないでゲームをし、ゲームによる兄弟げんかが増えた
- ・ 平日屋外遊びをさせたいが、時間もなく、交通事故や犯罪が心配で外遊びをさせられないので、DVDやゲームの時間が増えてしまう
- ・ 幼稚園以外で友達と遊ばせたことがない
- ・ 公園が近くになく、近くの小学校も立ち入り禁止なので、外遊びをする場所がない
- ・ 既製品で遊ぶことが多く、自分たちで工夫して遊ぶ力が弱い

アンケート調査の考察

子どもを取り巻く遊びの環境の変化におけるアンケート調査より様々な変化がわかってきた。子どもにとって遊びとはとても重要な役割を担っている。そのことは親の意識の低下により、今の生活環境から子どもに体いっぱい遊ばせることが難しいようだ。昭和の時代と比べて、近年の子どもの遊びの環境は外遊び中心から室内遊びに、集団遊びから個人遊びに、自然物の遊び道具からゲームなどのハイテク機器や既製品に、変わっていった。その要因として、遊ぶ施設が少なく、現代社会の状態が悪く犯罪や交通事故などの治安の悪さから田んぼや道端で気軽に子どもが遊べなくなったこと。自然の現象により遊び場の減少したこと。また、親の就労などにより親が子どもの遊びを見守ったりする時間がもてず、子ども自身も習い事などにより生活が忙しくなっていること。少子化、子育ての孤立化により遊び相手が減ったこと、遊ばせる親同士の関係が希薄化していること。外遊びの時間が持てないため、親の目が届く室内での遊びが増えてしまっている悪循環が起こっている。今回のアンケートでは、明らかに室内遊びが中心となっていることが明らかになった。近年メディアでも言われている子どもの体力の低下はこの結果をみても納得させられてしまう。



週3日以上、運動やスポーツを実施する子どもの割合(%)の比較

男子		女子	
親の世代	今の子ども達	親の世代	今の子ども達
77.6	60.0 (↓17.6)	69.1	33.9 (↓35.2)

※学校での体育の授業を除く

※親の世代は昭和52年度の11歳、今の子ども達は平成19年度の11歳

文部科学省 日本レクリエーション協会ホームページより引用

今後の課題として、子どもが安心して遊ぶことのできる、親も安心して子どもを遊ばせることのできる社会環境づくりをすること。公園や遊ぶことのできる施設を整備し、子どもが体をいっぱいに使って、五感をいっぱいに使って遊ぶことのできる場所と環境を作っていくことが必要だ。また、現在の家庭環境から室内で親子で遊ぶ機会が多いが、DVDやゲームなどで子どもの孤立した遊びをさせるのではなく、親子で体を使ったふれあい遊びで心と体の健康を作っていくこと。私自身が所属しているサークルでは、親子が室内で気軽に体を使ったふれあい遊びのイベントを提供している。室内でもそのようなふれあい遊びをすることで、ただの室内の遊びがもっと子どもにとって有意義なものになるのだ。保育者として、上記で述べたような子どもの遊びに関する環境を整えたり遊びの提供をしたりして、子どもだけではなく親子ともにケアをしていくことで、子どもを取り巻く遊びの環境を守っていくべきだと考える。

参考文献

Wikipedia

文部科学省 子どもの体力向上ホームページ

子どもの病気百科

厚生労働省ホームページ

「虐待は愛から起こる」
発行所 川出書房新社
著者 富田 富士也

まとめ

今回私たちは、今の子どもを取り巻く環境を様々な視点から調べてきました。私たちは自分たちが育った時代とは違う環境で育つ子どもたちを保育していく立場にあります。

少しでも子どもたちの環境を理解したうえで保育に役立てることができたらいいなと思い、研究をしてきました。

今回は大きく分けて、健康について、遊びについて、虐待について、食育についての4つに絞って研究を進めてきました。

どれも今の時代が問題とする子どもの環境問題として世間でもよく耳にする言葉であり、子どもの成長には欠かせない環境です。そのひとつひとつに背景があり、原因があります。

今回調べていく中で一番気になったことは家族で過ごす時間の短さでした。父親の帰りが遅く一緒に夜ご飯を食べない家庭がほとんどということには驚きました。子どもは幼少期にどれだけ人間関係を形成できるかが核となると思います。家族で過ごす時間が短いほど、コミュニケーション力も低下するのではないのでしょうか？

また、一緒に食事を作る機会がないという家庭が多かったことも気になりました。食材に対して興味を持つには、野菜を育てたり、料理をしたりなど、実際に食材と触れ合っていく経験が必要だと思います。家族で時間が持てない分、保育園で企画するなど、親子が一緒に取り組める機会を提供することも保育者の役割だと感じました。

今と昔の環境の中で、一番大きく変わったことは子どもが関わる人間の少なさです。昔は拡大家族で、祖父母との関わりも多い上に兄弟もたくさん存在しました。その中で、分け合う大切さ、思いやり、ルールを守ることや感情をおさえることなども知らず知らずのうちに学ぶことができたのではないのでしょうか。

このような環境で保育園という場所は最も人間関係の形成、子どもそのものの個性を育てる場所として最も大きな役割を果たさなければなりません。

幼児期に、大好きな友達、先生、家族と過ごした経験のある子どもは、人間として一番大きな人を愛する気持ちを大切にできると思います。

子どもがのびのびと成長できるよう、これから保育に携わる者として今回研究したことを糧にできるようにしていきたいです。